

アトモスフィア

学 術 用 語

大 島 泰 郎*

「私は hopper (バッタ) だけは食べられない」必死の形相で夕食の招待を断ろうとしているアメリカの女性生化学者を脇で見ていておかしかった。数年前、スリランカの国際会議の主催者が、hopper の夕食に誘ったときの光景である。私は hopper がカレー料理の一種で土地の名物であることを知っていたが、彼女は完全に誤解していた。言葉は難しい。共通の約束事の上にだけ成り立っている。

われわれの研究成果も、そこから引き出される概念も言葉を通して伝えられる。うっかりすると学術用語は本来的に明確に定義されているかのような錯覚に陥りがちであるが、共通の約束事が必要なことは hopper のケースと同じである。意味や定義も時と共に変化することすらある。まして、日本語の場合は翻訳という過程がよけいな混乱を招いている。

私が大学院生だった生命科学の黎明期には、補酵素という人と助酵素という人がいたし、眼のガラス体は硝子(シヨウシ)体ともいわれていた。比較的最近まで、「真核」「原核」のほかに同じことを有核・無核、被核・裸核ともいわれていた。用語を統一し、共通理解を図ることは学会の活動の重要な部分であろう。というか、重要な活動であらねばならないと思う。

日本生化学会編「生化学用語辞典」は、理事会の議決に基づいて編纂されたいわば学会の定める標準の学術用語集とみなされている。初版は15年くらい前に出版されている。最近、やはり理事会の議に基づいて改訂作業が行われ、東京化学同人社から第2版が出版された。

初版と同様、少数の編集委員の判断に基づいて編纂されているから、誤りや不適切な箇所も少なくないであろう。出版されたからといって、この用語集を生化学の学術用語に関する金科玉条ととらないでほしい。第一、新しい用語では、人によって内容が違っているケースも多々あり、完全無欠は期しがたい性質の事業である。今回の出版も用語の定義、用法を押しつけるものではなく、むしろ、生化学会の会員諸氏が意見を寄せ、より完全なものへと不断の修正を重ねていくべきたたき台である。学会には、このための窓口を設けてはどうかと提案したい。

第2版の出版については、理事会で報告したが、会員諸氏に報告する機会がなかった。今回、巻頭言を書くよう依頼されたが、まともな巻頭言を書く代わりに、勝手にこの場を使って会員への報告とさせていただきたい。改めて編集員会を代表して、今回の改訂にご協力いただいた方々にお礼申し上げますと共に、会員諸氏が修正または追加すべき用語について活発な提言をしていただけるようお願いしたい。

*東京薬科大学生命科学部